



芝哲夫先生とその時代（追悼 [化学史学会]元会長芝哲夫氏を悼む）

塚原，東吾

(Citation)

化学史研究, 37(4):218-220

(Issue Date)

2010

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90005665>



ともに、ひとつの時代が終わったという感慨を禁じざるを得ない。昨年9月、大阪大学で開催された化学史学会では元気なお姿を拝見し、芝先生のセッションの司会をさせてもらったこともあり、突然の訃報に驚くばかりである。小生のように化学をかじった者からすると、化学の世界で第一線の仕事をしながら化学史を極めていた芝先生には、脱帽すること殊更であった。小生は芝先生がかなりのご年配になってから接したので、穏やかな中からも眼光鋭い芝先生は古武士の風貌よろしく、腰の据わった鷹揚とした構えには、黒沢映画の風さえも感じられた。恬淡としながらも、「さあ、どこからでもかかってきなさい」と云わんばかりの無敵の風格を持つ芝先生からは、いつも闊達なる激励や刺激をたまわった。

小生にとって、芝先生はやはりハラタマとポンペ、適塾と大阪舎密局の芝先生である。なかでもハラタマの研究をはじめとする日蘭交流史への貢献、日蘭交流400周年でのハラタマ・シンポジウム(2000年)などの貢献に対して、オランダから2001年に「オラニエ・ナッサウ騎士勲章(Ridder in de orde van Oranja-Nassau)」を当時のオランダ総領事館ヤン・デ・フリース氏を通じて授与されている。これは大変栄誉のある賞であり、何しろオランダ王家であるオラニエ・ナッサウ家の「騎士」(Ridder)に列される(orde)ものである。サムライな感じの芝先生にはぴったりである。(この受賞についての正確な情報と記録については、デ・フリース氏も既に亡くなられたので、オランダ総領事館文化広報担当官ジュリアン・リックールト氏によって確認していただいたものである。)

芝先生の訃報に際して、ライデン大学医学部名誉教授のハルメン・ボイケルス博士は、「芝哲夫氏は蘭学研究において非常に大きな刺激を与えてくれる人物であり、研究面での革新性、心の広さ、そして研究にかける熱意は印象的であった。そして何より、同氏は、大阪においてまさにこの人ありと言えるような、適材適所を端的に表す人物であった。(the right man of the right place, Osaka!)そして松江で発見されたポンペの講義録を素早く翻訳され出版したものを私に見せられた時の驚きは忘れない。ハラタマ、緒方洪庵と適塾の研究など多くの研究分野について熱意を持ち展開していた同氏の死去は、蘭学と日本の化学史研究にとって大きな損失である。」との一文を寄せている。

芝哲夫先生とその時代

塚原東吾(神戸大学)

芝先生の訃報に接し、心からのご冥福をお祈りすると

そもそも戦時中、大阪舎密局の碑を見出されたときか

ら、日本の化学の淵源をライフ・ワークとされたという。その芝先生が、化学教師であるハラタマの研究をオランダで進めたエピソード（電話帳からハラタマという苗字の家に全て電話をかけたというものは、芝先生ならまさにやりそうだと思うせるものである。この電話による子孫の追跡をオランダで手伝ったライデン大学・講師の蔡妙齡（Miao Ling Tjoa）女史からも、芝先生のお人柄を偲び、訃報には驚きを感じたが、ハラタマの子孫を探し当てた折に、芝先生の精力的な調査を支援できたことを懐かしく思うとともに、先生の研究にかけた情熱に触れたことを嬉しく思える、そしてご冥福を祈りたいとの旨、一文をいただいている。このようにオランダ関係では、芝先生は大きな足跡を残し、関係者に強い感銘を与えた。ハラタマをめぐる研究を手始めに、書簡集の翻訳（フォス教授夫人との協力）や出版を始め、幕末・明治の化学は芝先生のエネルギーで、続々と解明されていった。

ポンペについて、松江でポンペの講義録・化学ノートが発見されてからの芝先生の仕事ぶりには、驚かされるものがあつた。オランダ語の手稿ノートを、大変な勢いで翻訳されたのだ。今思うなら、芝先生は、人生の残り時間を意識しておられたのかもしれない。日本化学史において、これだけ詳細な記録はきわめて貴重なものであり、芝先生のお仕事ぶりは、つくづく、刺激されるものであつた。

芝先生への追悼に代えて、古武士の風貌と書いたが、むしろ大藩のご家老のごとき包容力の大きなお人柄を表す個人的な思い出を一筆しておきたい。小生は日本帰国後の一時期ある難局にあり、またどうも人間関係などもうまくいかずに倦んでいたため、化学史学会とは若干疎遠となっていたことがあつた。その頃に芝先生より一喝されたことがある。ワシは君をひきたててやろうと思っておるんだ、こちらに顔を出さんとはいけしからん、君は若いだから、もっと働け、というわけだ。たしかに、非はこちらにあるし、いろいろ調子の悪い時のあの一喝は効いた。しかしこちら事情があつた。その旨、小生から一筆して、なんとかご海容を請うたのである。その折、芝先生から、お返事として丁寧なお手紙をいただいた。それは事情も分からず一方的に叱責したことをむしろ詫びるという内容であつた。これには逆に、全く恐縮した。あとでつらつら聞くと、会長職を退かれるころにあつた化学史学会では芝先生も大変なご様子であつたよ

うだ。そんな中、若手（あまり若くはなかったが）を激励する意味で、小生に活を入れようとしたのだらうという気持は、今になれば（自分もアカデミックには中間管理職、すなわち研究室経営にある立場なので）、まあ、よく分かる。あの一喝は、おとなしく聞いていただけでよかったのに、むしろいらん申し開きなどをして、逆に芝先生に気を遣わせてしまったのは、全く、今もって、恐縮千番であつて、今でも、冷汗の出る思いである。

このやりとりの後、1998年の津山での化学史学会では、ゼミ生たちを連れて参加した際、久々に芝先生とお会いして、小生の非礼を詫びた。芝先生からは、いつもながらの激励をいただいた。さらに小生の学生たちへの言葉がけもいただき、「君はいい青年たちを指導しておるな」と言われ嬉しかったことを思い出す。津山でのテーマであつた宇田川榕菴についてはシンポジウムや『化学史研究』はもとより、『化学』での宇田川特集にも芝先生とご一緒に執筆させていただいた。そしてその後も、相変わらず、どうにも散漫にして怠惰なる小生だったが、芝先生からは、さまざまな面で、まさに「引き立てて」いただいていた。ポンペの講義録を見つけた時には、本当に嬉しそうに、「すごいものを見つけたぞ」と語ってくれた。2001年にオランダからの勲章を受け、総領事のヤン・デ・フリース氏に呼ばれたパーティーでは、「次は、君の番だぞ。ワシが先で、すまん、ワッハハ」と、激励含みの冗談まで言われた。このような関係が2009年、昨年大阪での会議まで続く。辛うじて2005年には、不足が多く気も利かない会場担当だったが、小生の勤務校である神戸大学での化学史学会の開催もさせていただき、シンポジウムも組織できた。これで若干の恩返しできたのかもしれない。

最後になるが、芝先生の時代とは、化学者でありながら化学史をライフワークとする先生方の時代であつたように思う。ほぼみな（直接ではないかもしれないが最後の）戦争時代の経験を持たれている。もしくは戦後の冷戦とマルクス主義の隆盛期、そしてそれらによる厳しい対立を経験されている。そのためか否かはさだかではないが、阪上正信先生・立花太郎先生にしても柏木肇先生にしても、小生がご存命中に接した化学史関係の先生方からは、みな芝先生と非常に近いものを感じられた。ルーカス的な比喩を使うなら、だれもが歴戦のジェダイ元老院のメンバーの風格を持つように思える。それは先人方が、われわれとは歴史的な異文化を経験され自己形成

されたのだという意味もこめてである。だからこれからの問題は、化学そして化学者と化学史の距離感であろう。化学は専門化し、制度化し、細分化をますます進めており、化学史とか化学と社会の関係とかからやや距離を持つようになってきている。化学史自体も制度化して、その対象（object であり同時に subject）のはずの化学から、別のもの（それは果たして discipline と言えるだろうか？）になりつつある。果たして小生のような不肖のものが、芝先生の追悼文をしたためのなど、僭越も甚だしいのではと思われる。それはなぜなら、芝先生には、そもそも「本業」であったペプチド化学の方面でのお弟子の歴々がおられるはずだ。その筋の方々が化学史を書かれる時はいつ、どのようなかたちで来るのだろうか。基本的に芝先生の化学史を継承する方は、物事の順序として、そちらにおられなくてはならないはずだが、そのような継承性を想定するのは、間違いなのだろうか。そしてその方々と、われわれは、どのような関係になるのだろうか。興味はつきないのだが、ノーベル賞で化学賞が日本の「お家芸」とまで言われるようになってきている時代を芝先生がどのようにお考えになるか、芝先生が亡くなられた今となっても、われわれはいつも、あの激励や一喝を念頭において、芝先生に語りかけるように歴史的な対話をし続けるだろう。